

食事行動をとる擬人化エージェントによる
食事量の誘導
Inducement of Food Intake by Dining Agent

学籍番号：201321634

氏名：塩原 拓人

Takuto SHIOHARA

近年では、個々の生活リズムの多様化や家族と離れて生活するなどといった時間的また距離的な制約により、単独で食事をすることを余議なくされる状況も多くなった。そのような単独食事者に対する支援として、食事行動をとる擬人化エージェントが考えられる。

これまでの研究から、食事行動をとる擬人化エージェントを前にしたユーザはよりゆとりのある食事を行うことができることが確かめられている。また、対面共食においては食事相手の行動への同調が起きることがわかっている。

これらのことから、擬人化エージェントの食事行動の仕方がユーザの食事行動に影響を与えられることが考えられる。

そこでまず、食事相手の食事行動の仕方がユーザの食事行動に影響を与えるかどうかを調べるために対面共食において一方の食事行動の頻度を変化させた。食事相手の食事行動の頻度をユーザの半分、同等、二倍の三条件としたところ、ユーザの食事行動が同方向に影響を受けることがわかった。

次に食事行動の頻度がユーザの半分、同等、二倍の三条件となる擬人化エージェントを開発し、遠隔地にいる会話相手の映像の代わりに表示することで同様に実験を行ったが、共食相手の映像がエージェントである場合には、対面共食でみられたものと同様の変化はみられなかった。この事には、共食相手がエージェントであることと会話相手が遠隔地にいることの二つの要素が影響している可能性がある。

以上より、食事行動の仕方を意図的に変更することで共食相手の食事行動に影響を与えられることがわかったが、その効果を食事行動をとる擬人化エージェントから得るためには課題があることも明らかになった。

研究指導教員：井上 智雄

副研究指導教員：三河 正彦